

<序章>

「知っていること」から「できること」へ

◆教育現場から—日本人英語学習者の現状

p.3の英文を書いた大学生（英語専攻の1回生）は、英語力のレベルは平均的日本人英語学習者よりは上であるにもかかわらずプレゼンテーションの原稿(p.3)、口頭発表能力は高いとは言えなかった。

これはこの学生だけに見られる特徴ではない。筆者が過去10年以上に渡り指導してきた英語専攻の大学1回生の大半はライティング・スピーキング共にこの程度のレベルである。

→母語である日本語と英語の違い、授業時間数、クラスサイズ、環境など原因はいろいろと考えられるが、筆者たちは指導法や学習法にも原因があるのではないかと考えている。

◆「知っている」から「できる」へ

日本の英語教育は宣言的知識(declarative knowledge)を身につけることに重点を置いてきた。

- ・宣言的知識：単語の意味や文法などの知識のこと。長期記憶(long-term memory)から意識的に取り出して初めて利用することができる知識。

しかし、現実には「分かった」と思い込んでいるだけで「知識として正確に覚えた」とは言えない学習者がほとんどである。

→宣言的知識も十分に形成されていない。

近年、知っていることと実際の場面でその知識を利用できることは全く違うということが分かってきた。

→いかにして正確な知識を身につけた状態(accuracy)から、長期記憶中の知識を無意識のうちに利用できる自動化した状態(automatic)にするか、どのようにして流暢性(fluency)を身につけさせるかを検討する必要がある。

筆者は、音読やシャドーイングが「知識として正確に覚え」「知っている」という状態から「できる」という状態へと転化するための最適なタスクと考えている。

◆「できる」ようになるには？

シャドーイングは聞こえてきた音声言語をもとに、また音読は目で見た文字言語をもとに、共に心（頭）の中で内的な符号化を行い、どのような音であるかを認識して（音声表象=phonetic representation の形成という）、その後、声に出して発生するタスクである。（p.6 図1を参照）

両者を併用することにより、「知っていること」を「できること」につなぐことができる。

十分に繰り返しドリルを行うことで、様々なコミュニケーション活動の前提となる実際的な音声処理や文字処理が「できる」能力(=fluency)を身につけることができる。

◆第二言語習得と外国語習得

p.6 図2を参照

第二言語習得(2)：対象言語が母語として話されている環境で学習する場合 Ex.留学など

外国語習得：日常生活で使わない状況で勉強する場合 Ex.日本で英語を学習するなど

英語教育を実践して得られた結果は、一般的には第二言語習得(1)のメカニズムの解明に貢献すると考えられる。

今回私が担当した章は音読に関する具体的な活動についてというよりはこれからの章のための導入という形だった。

<第一章>

音読指導自己診断テスト

1.1 「音読指導自己診断テスト」に回答

1.2 自分の音読指導についての考え方や実践を自己評価する

1.3 「音読指導自己診断テスト」の活かし方

「音読指導自己診断テスト」に定期的に回答する。



自分の音読指導の問題点を把握・記録



自分の音読指導の改善

というプロセスを繰り返し、悪かった点が改善されるようにする。

1.4 「音読指導自己診断テスト」の各項目についての参照ページ p.9~11 を参照

今回私が担当した章は音読に関する具体的な活動についてというよりはこれからの章のための導入という形だった。

「音読指導自己診断テスト」については実際の指導教官がどの程度の点数になるのかを検証してみると面白いかもしれない。